
第1章

木村武山中国美術コレクションの由来

鶴間 和幸

はじめに

木村武山（1876<明治9>～1942<昭和17>年）は明治・大正・昭和期に活躍した日本画家として知られる。東京美術学校を卒業後に岡倉天心の弟子として北茨城の五浦を拠点に活動した。1907（明治40）年に出展した「阿房劫火」は、項羽に焼かれた秦の都咸陽の中国古代史の舞台を描き、高い評価を得た。その武山が膨大な中国美術のコレクションを収集し、その子孫が現在に至るまで民間で所蔵していることが近年わかった（図1）。2015年12月に所蔵先ではじめて実見する機会があった。そのコレクションの存在は世に広く紹介されることはなかった。学習院大学東洋文化研究所の2017～2018年度のプロジェクト「木村武山と中国美術コレクション」は、武山の孫にあたる木村正夫氏の協力で美術コレクションの入手経路、美術的価値を探るものであった。

美術コレクションの内容は、青銅器・玉器・石器・陶器を中心とするものである。木村武山は1942年に逝去しているので、コレクションは第二次世界大戦以前の中国から流出したものであると考えられるが、なかには武山亡き後の戦後に入手したものを含まれていることがわかった。中国考古学、歴史学の専門家が予備調査を開始したが、文物自体の真偽に惑わされることもしばしばであった。なかでも中華人民共和国成立の1949年以降の考古学の発掘によってはじめて認識された文物の類似品が、本コレクションにい



図1：木村武山コレクション

くつか見られたのである。明らかに複製品と思われるものも含めて、たとえば1965年湖北省の戦国時代の楚墓から出土した越王句踐の青銅剣、1986年に四川省広漢県で出土した三星堆遺跡の青銅人頭像、そして1974年陝西省臨潼県で発見された秦兵馬俑に類似する青銅兵士俑などが含まれていた。最終的に青銅器の成分分析を学外機関に依頼し、それらが複製品であるとの結果も得た。本報告書で扱ったコレクションは、真偽の確かなものを選び出して紹介するものとなった。

まずここでは報告書の総論として日本画家木村武山の生涯をたどりながら、コレクションの入手経路を探る手がかりを提供していきたい。それは木村武山をめぐる人脈の探索でもあり、とくに岡倉天心（1863<文久3>～1913<大正2>年）とその弟子たちや、陸軍大臣寺内寿一（1879<明治12>～1946<昭和21>年）らとの親密な交流をたどることでもあり、美術品の真偽を見極めるためには基礎作業となるものである。

木村武山が東京美術学校を卒業後、岡倉天心とともに北茨城で活動した時期に中国とどのように関わっていたのか。武山は1904（明治37）年に近衛歩兵連隊に応召されて日露戦争を迎えた。ただ中国に渡航して従軍した形跡はないが、軍人寺内寿一との出会いがあった。1907（明治40）年の「阿房劫火」の作品を制作するにあたっては中国西安の史跡を事前調査したわけではなかった。岡倉天心の弟子である早崎稔吉（1874<明治7>～1956<昭和31>年）が中国で撮影した古写真が茨城県立天心記念五浦美術館などに所蔵されており、そのなかに西安城や阿房宮遺址の写真がある。武山は現存する明代西安城を阿房宮として描いたと推測される。

茨城県天心記念五浦美術館、茨城大学五浦美術研究所や「阿房劫火」を所蔵する茨城県近代美術館において武山の関係資料を調査した。また武山の故郷である茨城県笠間市の邸宅には1935（昭和10）年に建立された大日堂があり、天井絵が残されている。木村武山、武夫、明正氏（長男）と三代居住された木村家にも訪問させていただいた。1930年代の武山の動向をみると、寺内正毅の長男寿一（ともに陸軍大臣）との交流が見られる。当時は中国において殷墟の発掘（1928～1937）が行われ、中国考古学発掘の草創期であった。日本人の多くの実業家によっても青銅器を中心に購入され、現在まで中国の美術品を収蔵する美術館、博物館がいくつかある。それらの由来を知ることも、コレクションの真偽を確かめるためには必要であった。

木村武山が残した膨大な中国美術コレクションは日本画家の武夫（1908<明治41>～1987<昭和62>年）、正夫（二男、1933<昭和8>年～）の三代にわたって木村家によって保存されてきた。すでにコレクションを調査した中国古代史の徐朝龍氏は、正夫氏の証言を得た上で、「武山は中国の都市部で民間人などから真贋を問わず様々なものを買集め、農村部にも入って地中から出土した遺物を農民たちから蒐集したりして、このよ

うな膨大なコレクションを作り上げた」「木村武山が仏画を通じて中国古代への強い憧れを抱きながら、実際に大陸にわたって中国の文物を様々な苦勞を重ねて集めたのである」「武山画伯は、旧満州の東北地方から黄河流域の華北地方にかけて、主に雄大な中国北方大地を中心に蒐集したようで、収集した骨董は全体的に中国北方地方に出土するものが多く、これが全体の傾向に反映されている」と述べている（徐朝龍『積古齋』私家版、2010年）。

しかし、武山自身1930年代に長男の武夫と一緒に北京に行き、絵の参考資料として日用雑器の購入との証言はあるが（2017年8月20日木村正夫氏からの聞き取り調査）、中国に入って出土品や骨董を買い集めた事実は十分明らかになっていない。武山と武夫の大陸への旅行の可能性は、1933（昭和8）年に朝鮮・九州旅行が確認できるだけであった。調査を進めていくにつれて、木村武山コレクションのすべてが中国で収集したものであるということは根拠のないものであることがわかってきた。その由来を探るには、まず木村武山の生涯を振り返りながら、明治、大正、昭和と生きた時代の流れのなかで、武山がどのように中国と関わってきたのかを明らかにすることが、コレクションの由来の真実に迫るものと考えている。

1. 木村武山の作品

木村武山、本名信太郎は1876（明治9）年、茨城県西茨城郡北山内村箱田（現在の笠間市）において、旧笠間藩士木村信義の長男として生まれた。15歳で東洋美術学校に入学、卒業後日本画研究科に進学、修了後、日本美術院創立時に副員として参加した。歴史画を多く制作し、1901（明治34）年日本美術院の正員となった。

生涯66年の木村武山の作品を、歴史人物画、静物画、仏教画に分けてみると、時代によって主題と力点が変化していたことがわかる。明治期の武山はおもに歴史人物画、大正期は静物画・花鳥図、昭和期は仏教画と大きく変化していった（図2）。木村武山展は調査の過程で把握しただけでも、1974年茨城県天心記念五浦美術館、1998年笠間日動美術館、2003年、2011年、2018年茨城県天心記念五浦美術館、2017年講談社野間記念館などで開催されている⁽¹⁾。2016年12月と2018年2月の2度訪れた茨城大学図書館では、茨城大学教育学部の小泉晋弥教授の解説のもとで屏風絵の「小春」（1914<大正3>年）など武山の作品を詳細に点検することができ、また小泉教授には武山の作品の特徴について特別に講義していただいた。2018年3月、押印から武山の作品とおぼしきスケッチを、小泉氏と、長年武山の作品に接して武山の年譜も作成された藤本陽子氏に鑑定していただいた際、線描は画家の身体に染みついたものであり、描写の曖昧さは武山のものとは考えられないとのご意見をいただいた。私たちは美術の専門ではないので、調査に当たっ



歴史画の時代：阿房劫火（明治）



静物画の時代：小春（大正）



仏教画の時代：不空絹索菩薩（昭和）

図2：木村武山の作品の変化
（『没後七〇年 木村武山の芸術』）



図3：木村武山「阿房劫火」
（同上）

ての大変力強い示唆となり、身の引き締まる思いであった。

歴史人物画では、『古事記』から着想を得た神話時代の「いざなぎいざなみのみこと」(1904<明治37>～1906<明治39>年)、「日本武尊」(1907<明治40>～1908<明治41>年)に始まり、『平家物語』からは高倉天皇(1896<明治29>年)、「熊野」(1902<明治35>年、平宗盛寵愛の女性)、「小督」(1903<明治36>～1904<明治37>年、高倉天皇寵愛の宮女)、「静御前」(1905<明治38>年、源義経の妻)、「源義家」(1907<明治40>～1908<明治41>年)、「祇王祇女」(1908<明治41>年、平清盛寵愛の姉妹)、『太平記』からは「楠木正行」(1903<明治36>年、正成の子)の人物が選ばれている。

なかでも中国を題材にしたものとしては『史記』から阿房宮劫火の故事が選ばれている。人物ではなく項羽によって焼かれた秦の都咸陽の阿房宮の光景である(図3)。前206年、『史記』巻七項羽本紀に項羽が咸陽に入城したときの光景が「項羽兵を引きて西のかた咸陽を屠ふり、秦の降王子嬰を殺し、秦の宮室を焼き、火三月滅びず」と記述されている。3ヶ月も燃え続けた咸陽の宮殿を想像して描いたものである。武山の生涯を見ても、「孔子」(1911<明治44>年)、「鍾馗」(1912<大正元>～1913<大正2>年)、「樊噲」(1930<昭和5>年)など数えるほどしか中国を題材としたものはない。「阿房劫火」は武山の五浦時代の作品であり、どのようにして中国古代の情景が描けたのか、その背景を考えてみよう。

武山は1906(明治39)年2月に除隊し、11月9日に日本美術院の第1部(絵画)の五浦移転にともなって転居した。小泉晋弥氏によれば、五浦の時代は横山大観のいう極貧の時代ではなく、闊達な時代であり、天心もボストン美術館の中国コレクションの多忙な勤務が始まったという⁽²⁾。翌1907(明治40)年1月に水戸で五浦四画伯招待会が開催され、その9月22日に五浦観月会が開かれた直後、10月25日に「阿房劫火」が出品された。第1回文部省美術展覧会(10月25日～11月30日)で菱田春草の2等賞に次ぐ3等賞を得た。この作品は五浦で制作したものと思われる。4人がその当時五浦で制作している様子が写真に残されている(図4・図5)。武山の父が新聞社に手配したものといわれている。一番手前で作業中の武山の背後に春草、大観、観山が並ぶ。詳細に写真を観察すると、このときの武山の制作中の作品は「阿房劫火」ではなく、人物を描写しているようである(図6)。かれらは五浦から出品した。武山は1906(明治39)年に「唐美人」という作品を描いており、それに続く中国を題材とするものであった。ちなみに「唐美人」の服飾の姿態は歴史的にも正確である。唐三彩や加彩の俑の女性の姿と一致している(図7)。唐三彩が発見されるのは1920年代であるので、何をモデルにしたのだろうか、まだ明らかではない。

「阿房劫火」の作品は茨城県近代美術館(水戸)に所蔵されている。美術館ではデジタ



横山大観 (1868～1958)



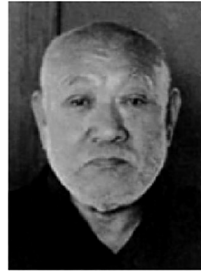
岡倉天心
(1863～1913)



下村観山 (1873～1930)



菱田春草 (1874～1911)



木村武山 (1876～1942)



*早世した春草のほかの3人は若い時代の写真を並べた。

図4：岡倉天心と4人の弟子

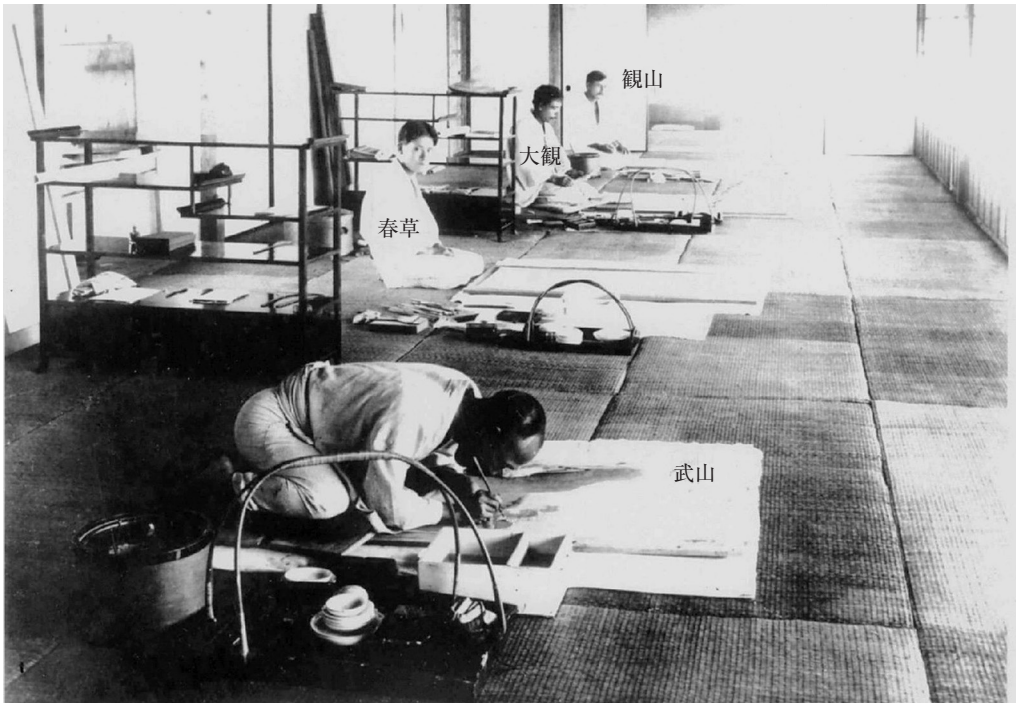


図5：五浦での制作風景 (木村正夫氏提供)

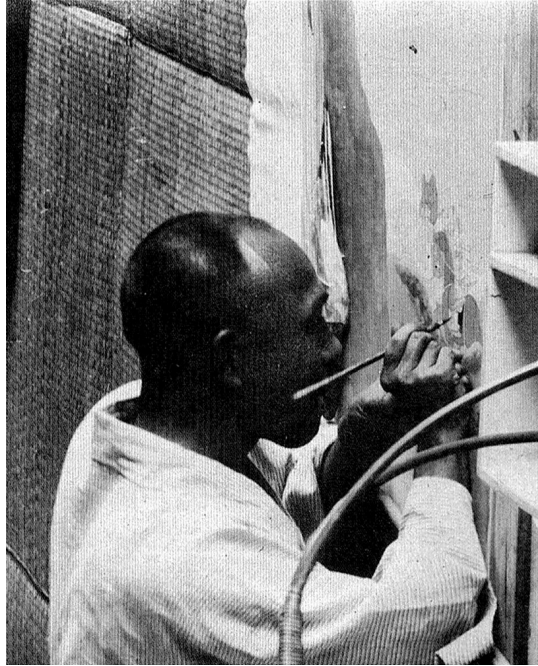


図6：武山の製作風景拡大

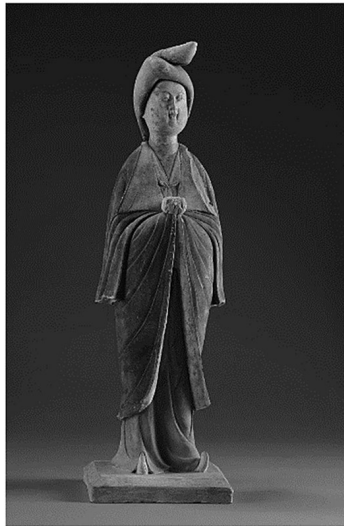


図7：木村武山「唐美人」と唐女性俑

(『下村観山・木村武山展』茨城県天心記念美術館、2003年)

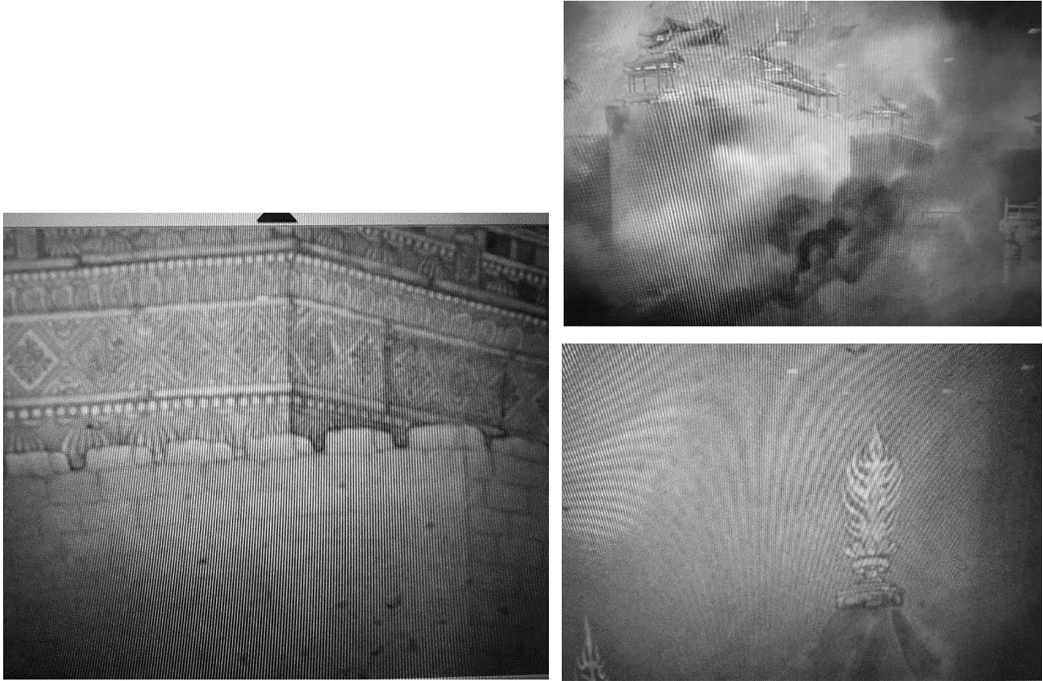


図8：「阿房劫火」デジタル画像拡大
(茨城県近代美術館)

ル画像からこの作品を細部にわたって拡大しながら見ることができる（図8）。「阿房劫火」の場合は、当時の西安城の古写真を参照したのではないと思われる。画像で観察すると、阿房宮の城壁は煉瓦作りであり、欄干や建築は秦の時代のものではなく、今も残る明清時代の西安故城の煉瓦、城楼と酷似している（図9）。仏教建築の仏塔の水煙（火炎をデザインしたもの）も描かれ、秦の宮殿とはとうてい言えない。阿房宮の遺跡は、現地には版築の基壇の痕跡や、屋根瓦などが残されているだけである。中国古代の建築は煉瓦作りではなく、黄土の土壌を突き固めて重ね合わせた版築という工法であった。もちろん武山がそのことを知るはずもなく、もっとも参考にできたのは、天心の弟子の早崎稔吉が現地の西安で撮影した古写真である（図10）。

早崎稔吉撮影のガラス乾板289枚が天心記念五浦美術館に所蔵されている。うち103カットが中国の風景写真であるという。早崎が陝西省の三原大学堂の教員として招聘されていた1903（明治36）年2月から1904（明治39）年7月までの時期に東京帝室博物館が中国文物調査を目的に委嘱して撮影されたものであるという⁽³⁾。また東京国立博物館でも148件、151枚の古写真を保存している。西安西門（安定門）の古写真は、1905（明治38）年に咸陽での調査の帰路で撮影したものであるという⁽⁴⁾。その城壁と城楼はいまでもそのまま残されている。早崎の写真のなかには「阿房宮ノ古跡ヨリ渭水ヲ距テ咸陽県ヲ臨

西安城西門階段



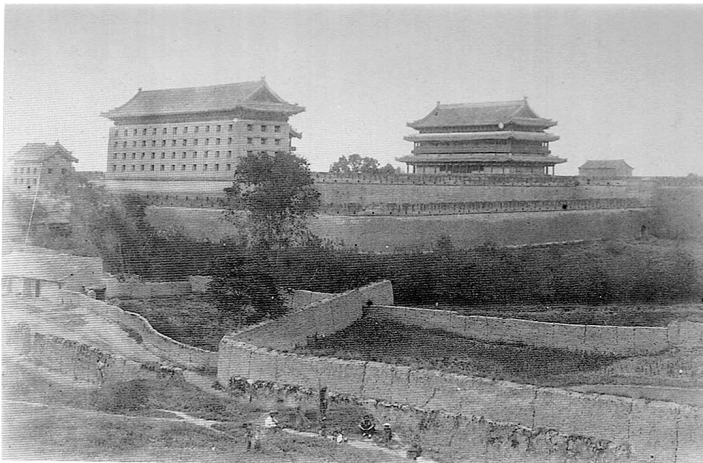
南門



城壁の上部



図9：「阿房劫火」と現代の西安城

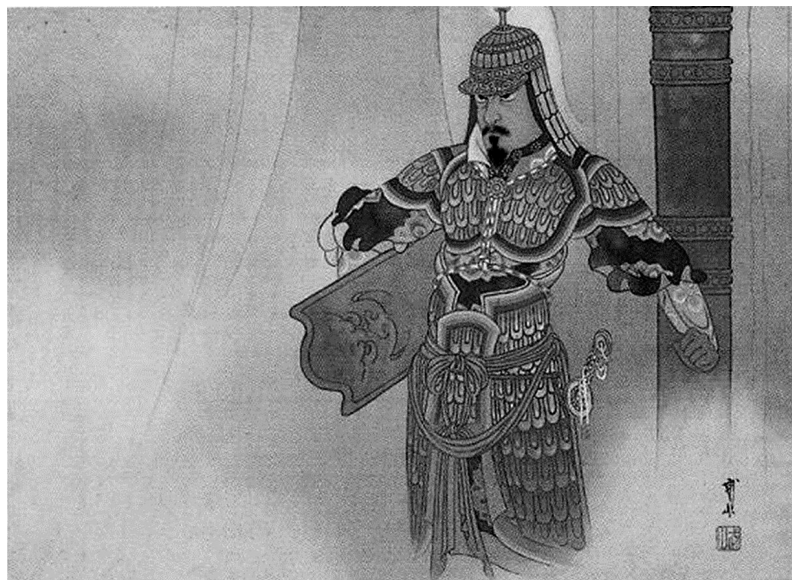


西安西門
1905（明治38）年



阿房宮ノ故城ヨリ
渭水ヲ距テ咸陽県
を臨ム

図10：早崎稗吉の古写真（『清朝末期の光景』東京国立博物館、2010年）



1930（昭和5）年講談社雑誌『キング』の世界史上の華絵巻の巻頭口絵

図11：木村武山「鴻門の樊噲」

（野間美術館）

ム」というものもあるが、渭水の北岸と南岸の光景は、阿房宮ではなく、誤解である。

武山は、のちには「鴻門の樊噲」（野間美術館蔵、1930〈昭和5〉年）を描いている（図11）。主任学芸員の豊田和平氏から話をうかがい、「鴻門の樊噲」は講談社の大衆娯楽雑誌『キング』の1930（昭和5）年12月号の巻頭口絵に野間氏からの依頼で描いたものあるということを知った。『キング』は1925（大正14）年1月に1巻1号が発刊され、1943（昭和18）年2月の19巻2号まで続いた雑誌である。「世界史上の華絵巻^{はなえまき}」として毎号口絵が掲載された。この号には東洋史学者で東京文理科大学教授の中村久四郎（1874〈明治7〉～1961〈昭和36〉年）の「鴻門の樊噲」の文章が添えられている。この雑誌は総合娯楽雑誌として百万部を突破し国民的雑誌となった。武山の絵も多くの人目に触れることになった。挿絵といっても絹地に描いた本格的なもので完成度が高い。武山がこのときになぜ樊噲一人を選んで描いたのだろうか。鴻門の会の場面では、安田靱彦がのちに描写したように、項羽と劉邦の会見の宴席の全体の場面も重要であるが、沛公劉邦の危機を悟って宴席に突入した樊噲も重要な人物であった。講談社の野間清治と武山の関係はその後1932（昭和7）年、笠間の大日堂建立に際して賛助金千円を拠出するなど続く。この武山の野間への礼状や武山の色紙類が野間記念館に所蔵されている。

武山以外の天心の弟子たちは中国を題材にした絵画を多く残している。横山大観（1868〈明治元〉～1958〈昭和33〉年）は「屈原」、「迷児」（キリスト・釈迦・孔子・老子）、「万里の長城」、「水国之夜」、「瀟湘八景」、「放鶴」、「游刃有余地」（包丁を余裕をもって

さばくという荘子のことば)、「竹林七賢」、「老君出関」、「寒山十得」、「虎溪三笑」(隠居した慧遠が思わず橋を渡って送って大笑した故事)、「楚水の巻」、「長江の巻」、「風蕭々兮易水寒」など多彩である。下村観山(1873<明治6>~1930<昭和5>年)は「蒙古襲来図」、「長安」、「草廬三顧」、「竹林七賢」、「老子」、「望南山」、「鹿・寿老・鶴」、菱田春草(1874<明治7>~1911<明治44>年)は若くして死去したこともあり、「王昭君」など中国題材の作品は少ない。武山が五浦において「阿房劫火」を制作した背景には横



図12：横山大観「屈原」

(『誕生150年横山大観展』日本経済新聞社・毎日新聞社、2018年)



図13：下村観山「長安一片月」

(『下村観山・木村武山展』、2003年)



前漢元帝の宮女、匈奴の呼韓邪単于に嫁ぐ光景。
服装は漢代の女性（右は漢代女官俑）のものではない。

図14：菱田春草「王昭君」

山大観の「屈原」（1898<明治32>年）（図12）、下村観山の「長安一片月」（1900<明治33>年）（図13）、菱田春草の「王昭君」（1902<明治35>年）（図14）といった兄弟弟子の作品を意識していたものと思われる。

他の天心の弟子に比べて中国を題材した作品が少ないにもかかわらず、生涯を通して膨大な中国美術コレクションを所蔵したことの違和感を感じざるを得ない。大観、観山は中国を訪問しており、より身近に中国を意識していた。木村武山の場合、コレクションは作品を描くための材料として所蔵したものではなかったと断言してよいであろう。「阿房劫火」は1974年9月に茨城県立美術館で開催された木村武山展に下図とともに展示されたという（前掲『木村武山展』図録）。その下図の行方を探したが、不明であった。

2. 岡倉天心の中国美術収集と木村武山

木村武山は岡倉天心とともに1906（明治39）年11月に茨城県多賀郡大津町字五浦に転居した。五浦滞在がもっとも長かった武山の五浦時代（1906<明治39>～1912<大正元>）の6年間に注目してみよう。岡倉天心と4人の弟子である横山大観（天心より5歳下）、下村観山（大観5歳下）、菱田春草（大観の6歳下）、木村武山（大観の8歳下）は五浦でどのように過ごしたのであろうか。

天心は東京美術学校の校長職を辞職し、五浦に転居したものの、実際には海外での活動が顕著であった。天心はすでに1893（明治26）年に初めての中国旅行を早崎稷吉と行っているが⁽⁵⁾、1906（明治39）年10月から1907（明治40）年2月にはボストン美術館の任務で第1回目の中国美術品収集旅行で清に渡っている。天津・北京から洛陽・西安・漢口・上海を訪れている。1907年には北魏時代の仏坐像、北周ならびに隋老君座像、唐

菩薩立像などを収集している。1906年日本で取得した唐代十一面観音立像は、東京国立博物館にも収蔵展示されている。1910（明治43）年には天心はボストン美術館中国・日本美術部長職に就いた。天心の次の中国訪問は、1912（明治45）年5月から6月であった。このときは北京・奉天・京城を訪れた。1912年北京で購入した作品リストも残されている。1912年に玉器・銅鏡を入手しており、これらはボストン美術館に収蔵されている。このように天心は五浦に常駐して謹慎生活を送っていたわけではなかった。むしろ東京を離れ、五浦を日本における拠点として海外に羽ばたいていた時代であったといえる。2018年2月茨城大学社会連携センター准教授の清水恵美子氏から「岡倉天心と五浦」のテーマでご教授いただいた。天心にとって五浦は国際的に活躍した時代の拠点であったという。六角堂など五浦の海岸は、日本、中国、インドのアジアの複合的景観が見いだせるという。また横山大観の自伝によれば、五浦時代は日本美術院の苦難の時代、新聞では都落ちと報道され、魚も食べられない餓死寸前の生活とされてきたが、大観と春草が去った後は、観山のもとに揮毫依頼の金屏風などが置かれ、作絵の督促の手紙が1日6、70通ほど届き、近くの旅館には催促者は数日待たされていたと報道されていたという⁽⁶⁾。

大観と春草の五浦滞在期間は2年弱と短い。1908（明治41）年には菱田春草は眼病の療養のために五浦を去り東京に転居し、大観も五浦の家の全焼のために上野に移った。武山と観山だけが1912（大正元）年まで五浦に残っている。1907（明治40）年9月22日の五浦の天心邸での仲秋観月園遊会の写真は天心と4人の弟子と夫人たち家族がそろって映っていて興味深い。大観、観山、春草が天心を囲んでいるが、武山が一人外れて後ろに位置する姿が年下の武山の地位を示している（図15）。

武山が他の3人の兄弟弟子の行動と異なるのは、武山は1904（明治37）年2月に日露戦争が起こると、宮城を警備する近衛歩兵第一連隊に応召され、陸軍歩兵中尉に任官（すでに21歳1898<明治31>年1年志願兵として近衛歩兵第一連隊入隊、1900<明治33>年歩兵少尉任官）、1906（明治39）年2月に除隊するまで作家活動が中断していることである。木村家には日露戦争中の1904（明治37）年8月から1905（明治38）年7月までの東京日日新聞70部も残されていた（図16）。母親が武山のために保存していたという。大観、春草の方は天心とアメリカに行き、ニューヨークとロンドンで作品展を開催、観山も1903（明治36）年から1905（明治38）年までイギリスに留学し、五浦以前にすでに海外で活動していたのである。武山には海外での活動歴がなく、国際的な行動派の天心の弟子たちと比べて特異であった。天心とともに五浦に転居した弟子たちも、武山だけが五浦を実質上の拠点にしていたといえる。ここには武山と海外で行動した天心の関係が見えてこない。

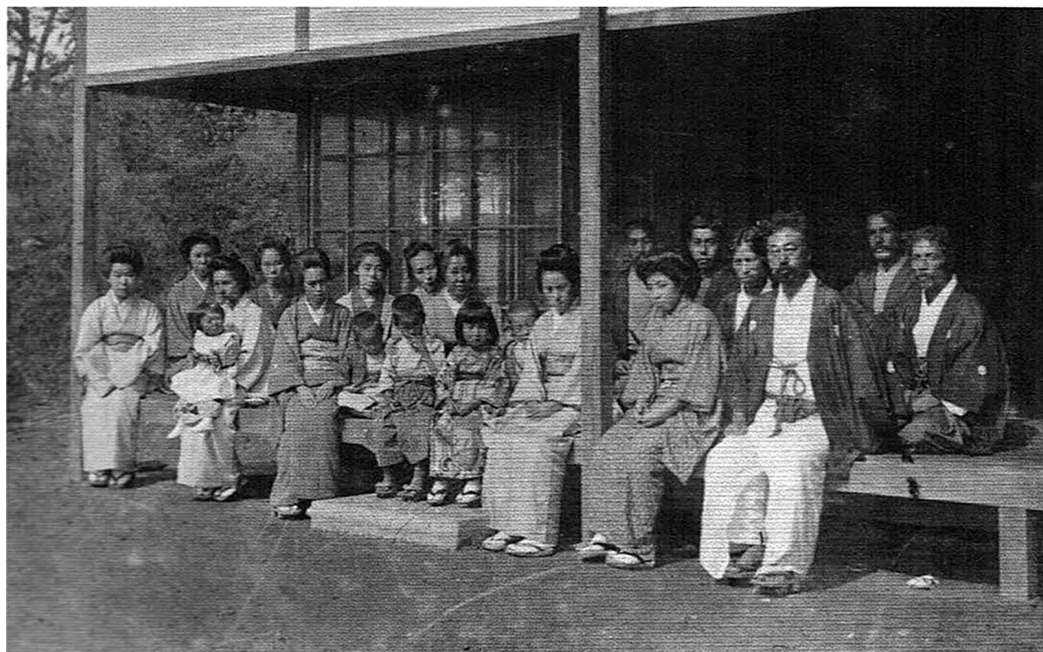


図15-1：1907（明治40）年 中秋観月園遊会
（茨城大学五浦美術文化研究所）



図15-2：園遊会での天心と弟子たち



図15-3：園遊会での天心の弟子の夫人たち

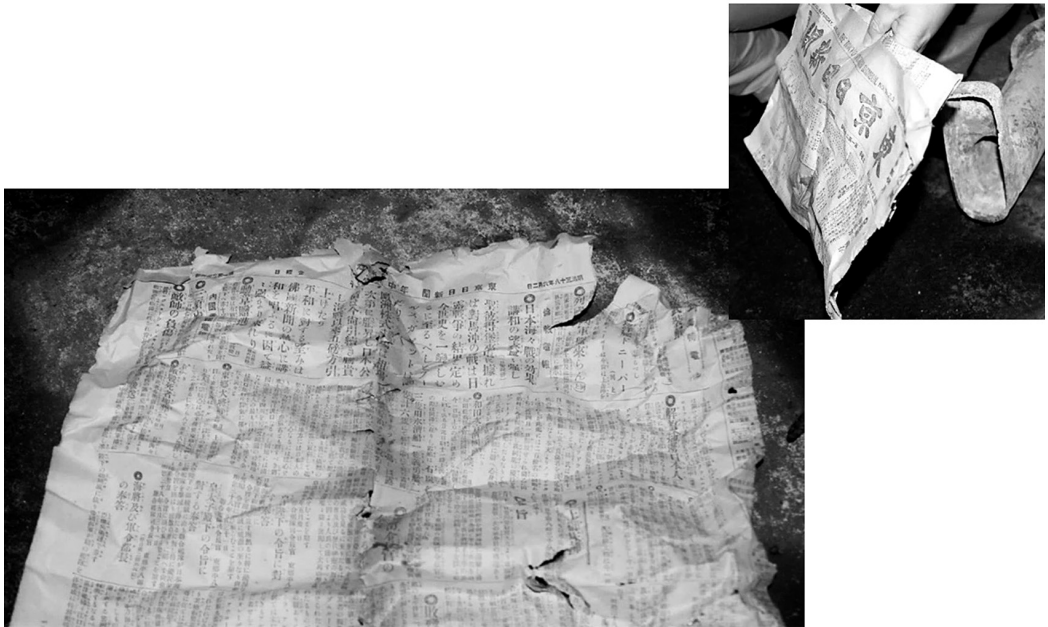


図16：1905（明治38）年 日露戦争を伝える東京日日新聞（木村正夫氏提供）

天心が中国に渡った清朝末の時代、多くの日本人が中国に渡り、中国の古文物や遺跡に関心を持っていた。足立喜六（1871<明治4>～1949<昭和24>年）、桑原隲蔵（1871<明治3>～1931<昭和6>年）、関野貞（1868<慶応3>～1935<昭和10>年）らであり、かれらのもたらした重要な情報は学術的にも現在まで活用されている。

3. 寺内寿一と木村武山

中華民国時代の1920～30年代は、中国各地で鉄道が敷設されるのにもなって、発掘が進み、多くの文物が海外に流出した時代である。日本にある中国古文物を収集・展示している博物館の多くは、この時代の実業家が出土品を購入して創立された。白鶴美術館（1934<昭和9>年）、書道博物館（1936<昭和11>年）、藤井有隣館（1926<大正15>年）、天理参考館（1926<大正15>年）、根津美術館（1941<昭和16>年）、大倉集古館（1917<大正6>年：大倉喜八郎1837<天保8>～1928<昭和3>年）などである。東京国立博物館にもいろいろなコレクションが寄贈されている。建築家横河民輔（1864<元治元>～1945<昭和20>年）東洋陶磁コレクションとして唐三彩がある。中国の発掘品は日本ばかりか海外の博物館にも流出している。根津美術館蔵の饗饗文方盃は殷墟侯家莊西北岡1001号大墓で発掘されたものと伝えられるが、また同所蔵双羊尊と同じものはロンドンの大英博物館にも所蔵されている。

この時期、寺内正毅の長男、寺内寿一は木村武山と懇意にしてきた。2人の出会いは、武山が1898（明治31）年21歳で近衛歩兵一聯隊に一年志願兵として入隊したときまでさかのぼり、寿一は当時士官候補生であった。木村家には武山の結婚のときの合同記念写真があり、武山夫妻の両脇を寿一夫妻が着席している。仲人を務めていたようである（図17）。1936（昭和11）年寺内が陸軍大臣に就任したときに、武山は陸相官邸に武神像（神武天皇像、院展出品）を贈っている。そのときに作品を前にして2人が並んだ記念写真が学習院に寄贈された寺内家の寄贈品に残されている。木村家にも制作中の武神を座敷に広げた前で寿一と武山が並んだ写真も残されており（図18）、2枚の写真は照合できる。上野谷中の武山邸で撮ったものであろう。翌1937（昭和12）年2月、武山は脳溢血で倒れ、笠間で静養に入った。武山はこれ以降左手で作品を描いた。7月に盧溝橋事件から日中戦争が始まると、寺内は8月から翌1938（昭和13）年12月まで北支那方面軍司令官として北京に滞在した。1938年冬に北平特別市市長余晋猷（日本留学、陸軍士官学校卒）から西周時代の青銅器の父辛鼎を贈られているのは、2人の親密な関係も物語る（図19）。寺内は1938年1月に金1万円を北京市に寄付し、余は穀物を購入して市内の災害民22700戸に支給している。この鼎は近年まで寺内家に所蔵されていた。

2017年6月24日ならびに10月20日学習院史料館の長佐古美奈子学芸員らとともに神奈



図17：婚礼の武山夫妻と寿一夫妻
(木村明正氏提供)



(木村家所蔵)



(学習院大学史料館蔵)

図18：寺内寿一と武山（1936<昭和11>年）



図19：西周父辛鼎

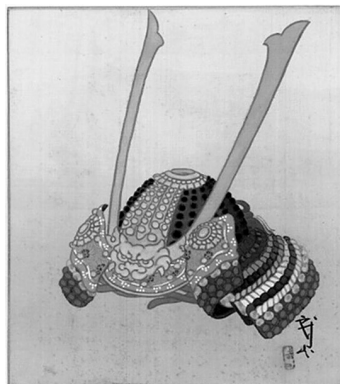
(<https://auction.artron.net/paimai-art0015821194/>)



百合



雛



甲

図20：武山から寺内家に贈られた色紙
(学習院大学史料館蔵)

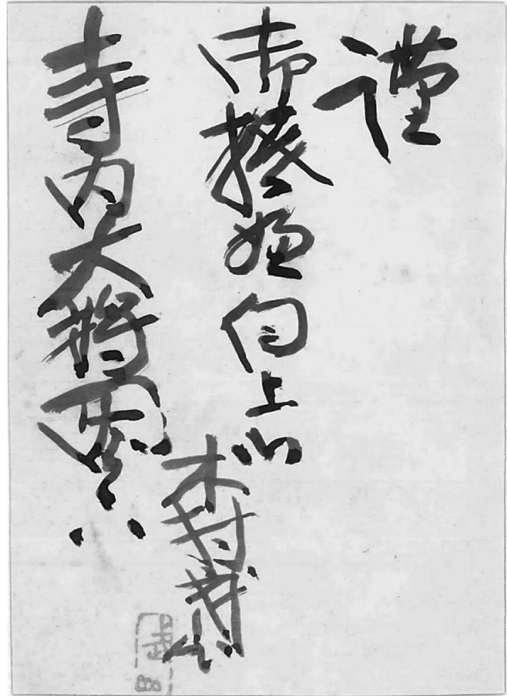


図21：武山の寺内宛写真（学習院大学史料館蔵）

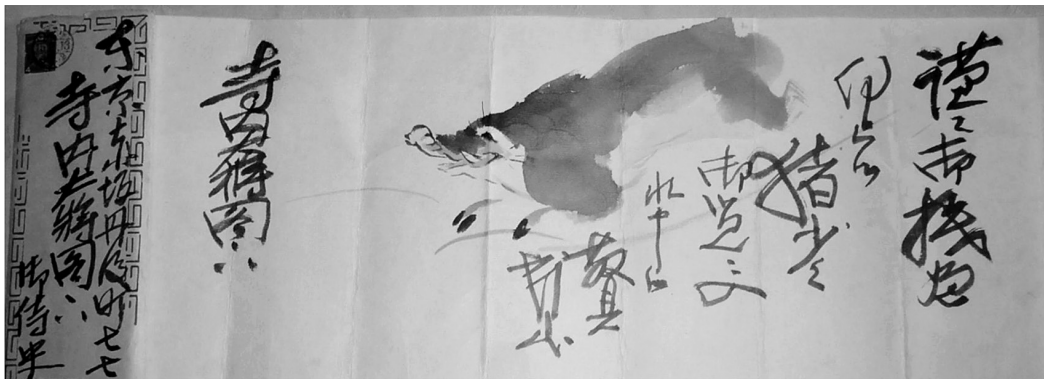


図22：武山の寺内寿一宛書簡（1940年2月11日、学習院大学史料館蔵）

川県大磯の寺内家を訪問、寺内寿一の夫人順子氏の姪で寺内家の養子となられた多恵子氏から寺内家収蔵品を見せていただく機会を得た。寺内家は武山と懇意にされており、寺内寿一夫人順子氏の母堂庚子氏のために武山は観音像を贈っていることがわかった。また武山から贈られた3枚の色紙も確認した(図20)。木村家にも寺内寿一から贈られた書簡があり、1940(昭和15)年2月13日の日付で、赤坂丹後町から送られた書簡から、寺内夫人からいただいた大磯の鰯を中野慶吉らと賞味したこともうかがえる。武山は夫婦の写真を寺内に送っている(図21)。また武山の同年2月11日に寺内家に猪の肉を送ったことが、添えられた猪の絵で分かる(図22)。寺内は大陸にいたので、夫人の順子氏が武山との仲立ちをしたのであろう。寺内は1941(昭和16)年11月以降、敗戦まで南方軍総司令官を務め、1943(昭和18)年に元帥となり、敗戦後1946(昭和21)年マレーで病死した。1942(昭和17)年3月に左手で描いた作品を寺内に送っている。11月の死去前のことであった。

1930(昭和5)年、武山は第2回聖徳太子奉賛会美術展覧会に奉天陥落を出品している。1905(明治38)年大山巖ら満州軍総司令部が騎乗で奉天に入城する場面である。武山の作品にも軍事的な色彩が濃くなっていった。

懇意にしていた考古学者末永雅雄(京都帝国大学考古学室)を通して、寺内は占領地大同にある雲崗石仏の保存に乗り出した。末永はしばしば寺内家を訪れていたという。寺内家寄贈品のなかに石仏の前で撮影した写真が数枚残されている(図23)。雲崗第20窟

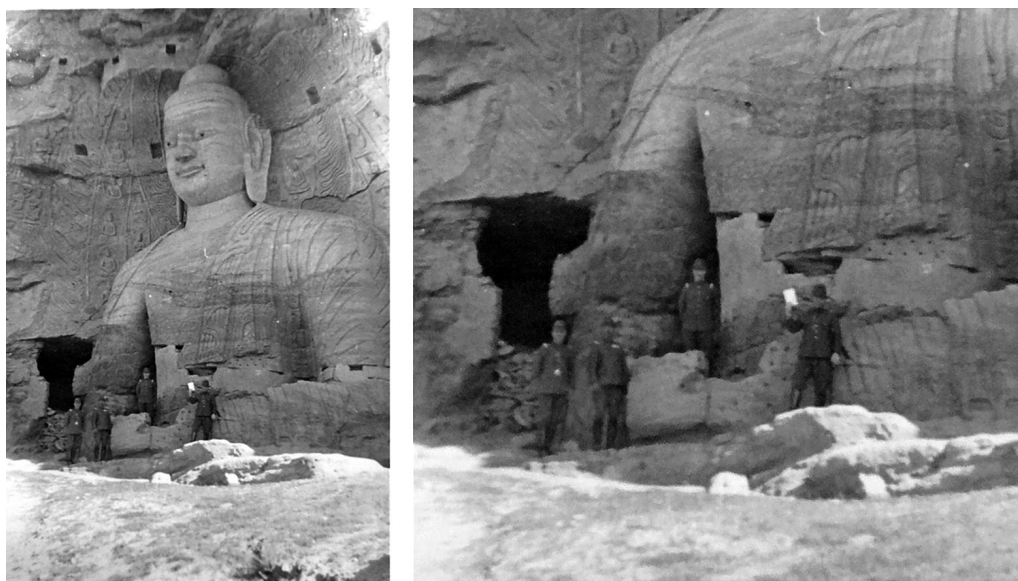


図23：大同雲崗石窟と寺内寿一(1937<昭和12>年)(学習院大学史料館蔵)

の前では寺内は佇んで記念撮影に収まっている。1937（昭和12）年9月、日本軍は山西省大同に入城、雲崗の石仏の保護令を發布した。10月19日の東京朝日新聞にも「皇軍の保護下に 大同石窟の大石仏」の記事と写真が掲げられている。写真に収まっている寺内ら5人の軍関係者は占領後すぐにここを視察したことになる（図24）。東方文化学院京都研究所の水野清一、長広敏雄らが翌1938（昭和13）年3月雲崗石窟寺に2ヶ月にわたる調査に入った。外務大臣広田は、張家口森岡総領事に外電を打ち、撮影のための足場の人夫150人の手配や、現地の軍への保護を依頼している。のちに末永は、雲崗石窟の調査に寺内が貢献しているにもかかわらず、調査隊は何も言及していないことに不満を漏らしている⁽⁷⁾。末永は寺内から「大同の石仏は傷つけずに北支派遣軍で保護」したいとの相談を受け、末永は「寺内將軍の発想がなければ調査研究の機会は逸したかもしれない」と回顧している。水野清一（1905<明治38>～1971<昭和46>年）は当時京都市東方文化研究所所員、1935（昭和10）年6月は20日間の紅山後の調査をしていたが、1938（昭和13）～1944（昭和19）年に雲崗石窟の調査を行い、『赤峰紅山後 熱河省赤峰紅山後先史遺跡』（1938<昭和13>年）、『雲岡石窟』（1951<昭和26>～1956<昭和31>年）の成果を出版した。水野清一らの調査成果は、現在では中国でも評価は高い。

2018年2月京都大学総合博物館収蔵の水野清一の将来品の石器を小林公明氏と調査した。『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第3部中国から遼寧省新金県の磨製石斧・



図24：雲崗石窟にて5人の武官（学習院大学史料館蔵）



図25：京都大学総合博物館収蔵石器



図26：水野清一将来石器（京都大学総合博物館）

扁平両刃石斧、赤峰紅山後の半磨製石斧破片・磨製石斧・石犁破片・石鋏・磨石・有孔石斧、山西省大同の磨製石斧、遼寧省の磨製石斧・扁平両刃石斧などを47点選び出し、実見する貴重な機会を得た(図25)。水野コレクションには大同で入手したという石器もあり、1941(昭和16)年購入品と記されている(図26)。雲崗石窟調査時に入手したものであろう。武山コレクションには出土地不明の石器類が456点にもものぼり、この調査で比較対照させていただいた。詳しくは小林公明氏の報告を参照されたい。総合博物館所蔵のものとの共通性があるものが確認されている。ここに寺内が介在している可能性もある。

寺内が北支那方面軍司令官として現地に着任した1937(昭和12)年8月の数ヶ月後に、笠間に静養中の武山のところに寺内から軍用便で嚴重に荷造りされた木箱数個が送られ、中身は印材のようなものであったという武山の弟子たちの証言がある⁽⁸⁾。これ以上の事実は確認できなかったが、何らかの文物を将来したことは間違いのない。学習院大学史料館に寄贈された寺内の写真のなかに、軽飛行機の前で撮った1枚の写真がある(図27)⁽⁹⁾。大同石窟で撮った写真とは異なり、冬服の厚手の外套を着ている。寺内と軍人2人、飛行士の4名が並んだ後方に木箱が移っている。1937(昭和12)年か38(昭和13)年の冬に中国の飛行場で撮ったものであろう。木箱には「一十八部隊、高級副官殿」との文字が読み取れる。高級副官とは司令官のような高官に就いた副官のなかで大佐級の者といい、公文書、図書などの保管を扱う。何を運ぼうとしていたかは不明であるが、興味深い写真である。ちなみに寺内は1938(昭和13)年3月、目黒で開催された黄河大茶会(驪山莊茶会)に向けて、北京から黄河の水と玉泉山の名水を空輸している。武山コレクションにも独特な木製の車輪があり、酷似したものを中国徐州で見出した。寺内寿一は徐州会戦(1938年4月7日～6月7日)にも参加しており、戦利品で持ち帰った可能性もある(図28)。

武山のパトロンであった中野家についても少しふれておきたい。1899(明治32)年、中野石材社長の中野喜三郎が茨城の稲田石を調査した際に、武山の父木村信義が積極的に協力した。1904(明治37)年、東京市内鉄道馬車が廃止され電車に変わったことで電車軌道敷設石の工事を中野石材が請け負い、稲田御影石の使用して、成功を収めた(図29)。中野組石材工業は中野喜三郎から弟の平吉、養子の慶吉、長男の喜久夫、長男の剛弘と引き継がれて現在に至る。慶吉は現地に稲田石材中野組を起こした。2018年5月7日茨城県友部にて慶吉の孫の中野剛弘氏から直接取材をすることができた。武山は、1940(昭和15)年の中野慶吉宛書簡に、大磯の寺内寿一夫人から鯛をいただいたことに言及しており、中野家との親密な交際ぶりがうかがえる⁽¹⁰⁾。1942(昭和17)年、武山は世田谷区千歳烏山町の中野喜咲(喜三郎二男)別邸で仮寓中に逝去し、5月11日中野邸から笠間警察署長宛に書簡が出されている。

武山は1912(大正元)年、五浦から東京下谷区下根岸町86に移住し、1918(大正7)



図27：軽飛行機の前の寺内寿一（学習院大学史料館蔵）



徐州に伝わる木製車輪
獅子山楚王陵博物館蔵近代車轂
（筆者撮影）



木村武山コレクション木製車輪
（木村正夫氏所蔵）

図28：木製車輪2点

年、谷中天王寺地内に屋敷を新築して移転した。1935（昭和10）年笠間市に大日堂を完成させ、1937（昭和12）年脳溢血に倒れた後はしばらく郷里笠間に戻っている。武山は五浦、谷中、笠間、世田谷と、活動の拠点を移している。

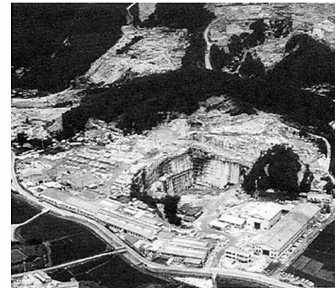
2018年12月13日～19日には私たちは北京・連雲港の調査を実施した。北京では故宮博物院、恭王府、北京大学紅樓、中国国家博物館、首都博物館、保利芸術博物館を調査した。戦前における文物の海外流出の実態を調査するのが目的であった。故宮では国家文物局の手配によって建福宮を特別に参観できた。この宮殿は1923（大正12）年に焼失したが、再建されたものである。故宮内の宦官が故宮文物を門外に密かに持ち出し売買していた証拠を消すために放火したと言われている。恭王府は1776（清乾隆41）年に創建され、のちに清咸豊帝の弟恭親王の邸宅となったもので、辛亥革命後に山中商会が関わって多くの財宝がここから国内外に流出した。旧北京大学紅樓は寺内寿一が北支那司令官として駐在していた場所であり、故宮北の景山公園に近い。中国国家博物館ではとくに非発掘の青銅器の展示品のなかに由来をうかがわせるものが数多く見られた。首都博物館では遼代契丹の特別展が開催中であり、武山コレクションのなかの遼代文物との関係をうかがわせるものがあり、参考になった。保利芸術博物館は国営企業が運営するはじ



実業家 中野慶吉（大正12年）



創業者中野喜三郎と4代剛弘氏



中野組石材工業株式会社(前山丁場と本社・工場全景)

稲田御影石採掘場



都電の敷石(現在、敷石のみかげ石は銀座3丁目歩道等に再利用されている)

東京市電敷石



第一生命ビルの石材

図29：武山のパトロン稲田の石材業中野組

めての博物館であり、海外流出文物を数多く購入している。著名な考古学者が顧問として参加しており、中国国家博物館とともに、流出文物の買い戻しに積極的である。展示品には流出先、購入先は明示していないが、図録では多くの研究者が1点ずつ丹念に類似品の有無を調べているので、出土場所を探れる事例もあり、本プロジェクトのコレクションの由来を推測する作業に大変役立った。

そのほか武山コレクションを国内の美術館所蔵の青銅器と比較するために調査を行った。山田高大（人文科学研究科史学専攻博士前期課程）には奈良国立博物館、天理参考館、和泉市久保惣記念博物館、泉屋博古館において青銅器のコレクションの入手経路を調査させた。とくに泉屋博古館の住友春翠が義和団事件時に日本の骨董市場に流出した殷周青銅器を購入していた事実は重要である。RAには個別に調査をお願いし、レポートを提出していただいた。堀井裕之「中村不折コレクションについて」では、書道博物館収蔵の西域発見の写真類が中国人の旧所蔵者から骨董商を仲介して売買された経路を明らかにしてくれた。旧所蔵者は清末の政治家であり、蔵書家、収蔵家であった。吉田愛は武山の旧宅付近の上野谷中の岡倉天心記念公園、横山大観記念館を調査した。小二田章は「文物日本流入に関する文献リスト」を作成した。3月4日には飯塚義之氏（中央研究院地球科学研究所研究技師）にコレクションの青銅器の化学分析を依頼した。武山コレクションの真偽の区別がほぼ見えてきた。武山が戦前入手したと思われるコレクションには一定の傾向が確認できる。

陶磁器については中国陶磁考古学が専門の森達也氏（沖縄県立芸術大学教授）に簡単に鑑定をお願いした。複製品、模倣品も多かったが、古いものでは以下の通りである。南宋～元 輸出用製品、市場価値は小さい、元～明の南方の窯、墓葬出土品か、10世紀五代十国の安徽省の窯の白磁、南宋の南方の窯の製品、南宋の福建の窯の製品、南宋～元の福建の窯の製品、15世紀龍泉窯、質はよくない、南宋～元の四川あたりの南方の製品、南宋の青白磁、福建の徳化窯、明万暦年間の煎茶の碗、明16世紀終わり頃の景德鎮窯、南宋の南方系の窯の製品、19世紀福建あるいは広東系の染付、南宋の南方系の福建あたりの窯の青白磁、16世紀景德鎮窯の製品、宋～元の香炉、景德鎮窯、16世紀終わり～17世紀の景德鎮窯の日常雑器、16世紀初めの景德鎮窯の青花（染付）、民国期の景德鎮窯、清～民国期の日用品、民具といった具合である。武山のもとに戦前に集まった可能性は高いように思われる。現在の市場（骨董）価値は数千円程度だが、戦前の将来品であれば、武山コレクションに入っている意味はあるとの意見をいただいた。

4. 中華人民共和国後（1949～）の出土文物と武山コレクション

武山コレクションには、1960年代以降に中国で発掘された文物と酷似あるいは類似し

ているものが見られた。1965年湖北省江陵县望山1号墓出土越王勾践青銅劍（図30）、1966年山東益都蘇埠屯出土青銅器、1969年甘肅省武威雷台後漢青銅車馬俑（図31）、1974年秦始皇帝陵兵馬俑坑出土兵士陶俑と類似した青銅將軍俑・兵士俑（図32）、1977年湖北省隨州市曾侯乙墓出土編鐘と金人（図33）、1986年四川省廣漢市三星堆遺跡出土青銅人頭像（図34）などである。また大英博物館と根津美術館に所蔵されている双羊青銅尊の類似品がある（図35）。両博物館のものは1920年代に湖南省で出土したものと推定される。コレクションには1938（明治13）年に湖南省寧郷県で出土した殷代の四羊銅方尊（中国国家博物館蔵）の類似品があるが、明らかに複製品とわかる稚拙なものである（図36）。2002年頃に購入した事実が分かっている。玉器については1980～90年代の複製品であることがわかり、今回の報告書ではふれることはしなかった。

これらのうちとくに越王勾践劍、青銅將軍俑・兵士俑、三星堆青銅人頭像については、材料の化学分析を行った。本プロジェクト開始前、学習院大学国際研究教育機構は東京文化財研究所（独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所）に青銅器6点の蛍光X線の分析を依頼し、2016年8月1日に実現した。当時岡田健保存科学研究センター長、早川泰弘保存科学副センター長、大塚将英分析化学研究室長に引き受けていただき、詳細な「木村武山コレクション青銅器の材質調査結果」を提出していただいた。結果として後世の複製品である可能性が高いことになったので、調査結果を外部に公表する機会はなかった。ここでは木村武山コレクションの真偽に関わる部分があるので、あえて一部

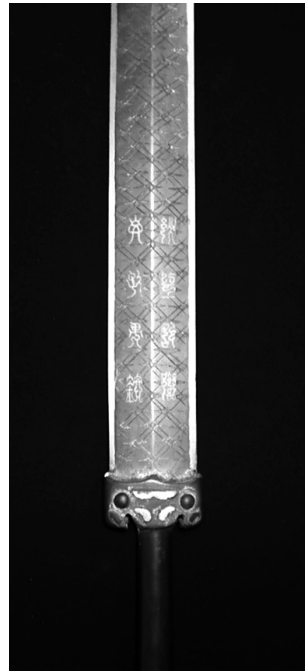


図30：越王勾践青銅劍
（木村武山コレクション）



図31：武威雷台後漢墓青銅車馬俑（木村武山コレクション）



図32：青銅兵士俑（木村武山コレクション）



図33：曾侯乙墓編鐘（木村武山コレクション）



図34：三星堆青銅器（木村武山コレクション）



木村武山コレクション



大英博物館蔵 (筆者撮影)



根津美術館蔵
(<http://www.nezu-muse.or.jp>)

図35：3つの双羊尊



木村武山コレクション



中国国家博物館蔵

図36：殷四羊銅方尊

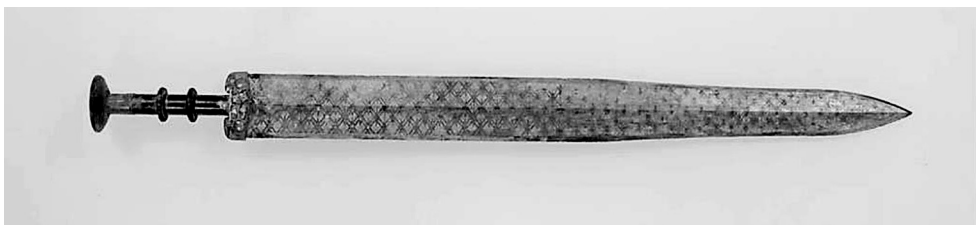


図37：東京国立博物館所蔵銅劍

(2016年9月16日特別閲覧)

の分析結果をまとめさせていただく。分析対象物件は6点、①三星堆人頭像（角頭）②三星堆人頭像（丸頭）③三星堆人頭像（平頭）④將軍俑⑤兵士俑⑥越王劍である。分析方法は蛍光X線を用いて銅・錫・鉛・鉄・硫黄・砒素・クロムなどの化学組成を明らかにするものである。X線回折も同様な分析ができる。たとえば角頭人頭像では3箇所測定し、亜鉛が98%と以上に高く、銅は1～2%と表面の緑色の錆に由来していると考えられる。丸頭人頭像の方は地金材料は銅74～75%、亜鉛11～12%の真鍮であると推定、錫5%、鉛5%～8%も検出、鉄2～3%は表面に付着した泥土の影響も大きいという。將軍俑も地金材料は銅と亜鉛の合金である真鍮であると推定した。銅59～65%に対して亜鉛30～34%と高い数値であり、青銅とは言えない。越王劍も銅63～71%、亜鉛が28～36%を真鍮の材質であることがわかった。両刃部分からはニッケルが検出された。

この劍は見るからに新しく製造したものであり、比較のために東京国立博物館所蔵の銅劍TJ-5700（春秋戦国時代）を調査した。同類の青銅劍は1965年に湖北省江陵県望山1号楚墓で発見された越王句踐青銅劍と無銘菱格紋劍であり、前者は湖北省博物館、後者は中国国家博物館に所蔵されている。東京国立博物館所蔵の銅劍は後者の菱格劍に類似している（図37）。越王句踐劍も劍身は菱格紋であり、これは中国側の分析調査によれば、硫黄やクロムでコーティングしていることがわかった。劍身の酸化や錆を防ぐために施されたものである。東京国立博物館所蔵の劍は、1998（平成10）年購入とあるだけで、詳しい情報は報告されていない。購入時の学芸員にも問い合わせたが、由来など詳しい事情は明らかではなかった。

武山の長男の木村武夫は前田青邨（1885<明治18>～1977<昭和52>年）の弟子であり、平山郁夫（1930<昭和5>～2009<平成21>年）は兄弟弟子に当たる。その平山とも訪中している。武夫がどのようなコレクションを入手したのかは調査することができなかった。

おわりに

2018年6月17日に木村武山コレクションの解明についてのプロジェクト報告会を学習院大学内で開催した。「木村武山コレクションの由来」（鶴間和幸・于保田）、「木村武山コレクションの玉器」（江村治樹）、「木村武山コレクションの石器」「木村武山コレクションの銅鏡」（小林公明）、「木村武山コレクションの青銅器」（鈴木舞）、「木村武山コレクションの俑」（于保田）の各報告が行われた。コレクションには真偽混在しているので、コレクションの入手時期、経路の解明が早急に求められることを共通の理解とするに至った。

本報告書はコレクションの全貌を完全に整理したものではないが、東洋文化研究所に鈴木舞氏が赴任してから、地道な調査が行われ、真偽が確かなものを選別して報告する

ことができるようになった。以下の報告内容はその成果である。

これまでのプロジェクトの経過を最後に示しておき、巻頭の文章のまとめとしたい。

- 水戸・五浦・笠間調査（学習院大学国際研究教育機構）2016年12月9日～12月10日
 - 東京文化財研究所による青銅器の材質調査
2016年8月1日 学習院大学国際研究教育機構
岡田 健・早川泰弘・大塚将英（東京文化財研究所）
 - 東洋文化研究所一般研究プロジェクト
「木村武山と中国美術コレクション」2017年4月～2019年3月
代表研究員 鶴間和幸（学習院大学文学部教授）
研究員 荒川正明（学習院大学文学部教授）
客員研究員 村松弘一（淑徳大学教授）・于 保田（日本女子大学名誉教授）・北村
皆雄（早稲田大学招聘研究員）・三浦庸子（駒沢女子大学講師）
R A 吉田 愛・堀井浩之・小二田章
 - 寺内家訪問 2017年6月24日、10月20日
 - 講演 2017年9月15日
小林公明（井戸尻考古館元館長）
「武山コレクションの石器—先紅山から夏家店上層文化まで—」
学習院大学北1号館4階東洋文化研究所会議室
 - 講演 2017年10月20日
長谷川怜（皇學館大学文学部助教）
西山直志（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）
「寺内寿一とその周辺—木村武山との関係を中心に—」
 - 講演 2017年12月18日
広中一成（愛知大学国際コミュニケーション学部非常勤講師）
「日本軍の華北戦略と中国文物の破壊・流出」
学習院大学北2号館2階史学科閲覧室
 - 水戸・五浦・笠間調査18名 2018年2月27日～2月28日
 - 木村武山コレクション報告会
日時 2018年6月17日（日）9：30～13：00
場所 学習院大学北1号館3階308号室
プログラム
Andrew Limond（KBCC代表）挨拶
-

鶴間和幸 「木村武山コレクションの由来」
 江村治樹 「木村武山コレクションの玉器」
 小林公明 「木村武山コレクションの銅鏡」
 鈴木 舞 「木村武山コレクションの青銅器」
 于 保田 「木村武山コレクションの俑」
 小林公明 「木村武山コレクションの石器」
 鶴間和幸 挨拶

○2018年12月13日～12月19日

北京・連雲港調査 鶴間和幸・恵多谷雅弘・福島恵・段宇・莊卓燐・周昀

○2018年3月2日～3月7日

北京出張（瑠璃廠・首都博物館・国家博物館・保利美術館・潘家園旧貨市場）
 于保田・段宇

注

- (1) 展覧会の図録は以下の通りである。『郷土が生んだ日本画の巨匠木村武山展』茨城県立美術館、1974年、『木村武山展』笠間日動美術館、1998年、『下村観山・木村武山展』茨城県天心記念五浦美術館、2003年、『没後七〇年 木村武山の芸術』茨城県天心記念五浦美術館、2011年。
- (2) 小泉晋弥「日本画という現代絵画」『日本絵画の創跡二二』クオリアート、2017年。
- (3) 中田智則（茨城県天心記念五浦美術館）「茨城県天心記念五浦美術館所蔵・早崎稜吉撮影ガラス乾板について—中国風景写真を中心に」
- (4) 関紀子「清朝末期の光景—小川一真・早崎稜吉・関野貞が撮影した中国写真—」（『清朝末期の光景—小川一真・早崎稜吉・関野貞が撮影した中国写真—』東京国立博物館、2010年）。
- (5) 鶴間和幸「天心の中国認識—『支那南北の区別』をめぐる—」『茨城大学五浦美術研究所報』第9号、1982年。同「天心と中国」森田義之・小泉晋弥編『岡倉天心と五浦』中央公論美術出版社、1998年。
- (6) 清水恵美子『五浦の岡倉天心と日本美術院』五浦歴史叢書6、岩田書院、2013年、『岡倉天心 五浦から世界へ：茨城大学国際シンポジウム2016』思文閣出版、2018年。
- (7) 「寺内將軍の思い出」『元帥寺内寿一』芙蓉書房、1978年所収。
- (8) 佐藤一夫（茨城郷土美術史懇話会会員）「木村武山（5）」『耕人』第五号。
- (9) 学習院大学史料館に寄贈された写真資料などは、長谷川怜・西山直志両氏の整理による。西山氏には寿一の関係新聞記事なども整理提供していただいた。
- (10) 猪野嘉久『弓道範士中野慶吉』（中野慶吉至誠館同門会、1993年）に中野慶吉と木村武山の親しい関係について言及がある。